

魔法少女まどか☆マギカ 同人二次創作ノベル

あなたもいずれ魔女になる[*sample*]

You will be a malefica too.

THE ICBM / サワキ

もくじ

第0章	生前妄想
第1章	なんだか会ったことがあるような…
第2章	青い炎へ向かって
第3章	ルビーを思わせる光りの中で…
第4章	後ろは振り向かない
第5章	反射的に走りだして
第6章	あなたのコトしか考えられない
第7章	凜としていたかった
第8章	失ったのに気づかないコト
第9章	なんで誰もいないの？
第10章	青いドレスが全て
第11章	もうこれで大丈夫
第12章	おそろしい夜が来た
第13章	いつも結局そう…。

このサンプル版には

第1章 〈なんだか会ったことがあるような…〉のみ
収録されています。

あなたもいずれ魔女になる

[1:なんだか会ったことがあるような…]

公園の空気は周りと違っていた。周りを見ながら、巴マミは胸元に手をやる。無意識だった。音色が——子供の引くようなピアノの音が、少し遠くから聞こえて——きた。

いるのは、わかっていた。

「ここね」

公園の奥に、集会所があった。二階建て、こんな時間——二十四時をまわっている時間なのに、電気がついている。だけど、その色はどこか冷たく歪んでいた。手を伸ばした。指にはめた宝石が光を放ち、建物の輪郭が一瞬にじむ。桃色のもやがあふれて、目の前に広がっていく。

短いテンポの音楽は、その中から漏れてきた。あふれる音楽は、ただ空気中にあふれ出て消える。風が吸い込まれていく——結界に開いた入り口は、呼吸するように空気を出し入れしていた。

いつものことだった。マミは中に飛び込む。黒い通路がみえた。中は、はるか高い天井と、歪んだマネキンが並んでいる——それぞれが、ポップでかわいらしい服をまとっていた。マネキンはぼけた写真のように並んでいた。

魔女の作り出す結界の中は、音楽ホールとブティックが混ざって見えた。

一瞬の油断が命取りになる。キュウベえはいなかった。この結界にいるのは、魔女とその手下と彼女——この結界を破りにきた魔法少女しかいない。

いつも、そうだったし、結構大変だったけど、だからといって、魔法少女になったことを後悔したことなんて——あったけど、だけど、それはそれだと思っていた。

マネキンの間を抜けると、そこには、ガラスで出来た扉があった。重かった。ガラスと鏡が水彩絵の具のように混ざりあっている。蝋燭の部屋だった。マネキンに変わって、蝋燭が並んでいた。はるか向こうに高い——高層ビルほどの蝋燭があつて炎を燃やしている。蝋の臭いが鼻をついた。

「今日も、お仕事ね」

結界に穴を開けた時と同じように、彼女は手を伸ばし、身体を包む『魔法の力』に身をゆだねた。風が螺旋を描きながら、制服姿の彼女の衣服を一瞬で拭うと、上に光を重ねた。少女は黄色い光を帯び、ボールは強まっていく。ルージュを引いた顔——魔法少女への変身を一瞬で完了させたマミは、翼を広げるように、宙へ飛び立つと、マスカット銃を抜き、その日はじめての銃弾を放つ為、引き金に指をかけた。

音符の波が左右からクラッカーを放ったように迫ってきた。マミは、さらに身体を上に向けた。

音符は放物線を描き、はるか下を通過していく。白と黄色、茶色のコスチュームのコントラスト鮮やかに、光の尾を引いたマミは、銃弾を装填した銃を左右に握っていた。まるで、カマキリみたい——思ってから、意識を集中させていく。身体を翻し、銃弾を叩き込んだ。

ビルほどの高さもある蠟燭は、銃弾にビクともしなかった。流れ星のように飛び去っていく弾丸は、上に下に放物線を描く——

新たな銃を抜いた。長い長い銃身には細かい彫刻が施されている。一回使っては消える魔法のマスカット銃は、白銀のボールに包まれて、長く長く伸びている。

マミは、周り——結界を見回した。蠟燭の列の向こうにキルトがデタラメな配列で広がって、サーカスを思わせる風船が、ゆっくりゆっくりと、風いだ海に浮かんだブイのように流れている。

「さっさと決めるわよ！」

魔法少女の装いはきっちりと包まれていた。宙を駆けるマミは、身体が少しずつ軽くなっていった。空を駆けるたびに身体の軽さを感じた——

重力が少なくなると、肩の荷がなくなったみたいだった。頂点まで達する。銃口を向けた——その先、巨大な蠟燭に手をかけている影がみえた。フェルト生地で覆われたモミの木のような姿

——魔女コルネットだった。

飛び出す弾丸は空気に触れて火花を広げた。

「はずした——？」

魔女はくると避けてのぼっていく。間が離れる。生地の間にあいた黒い闇の中に、丸い瞳が見えた。彼女はそのまま地面に降りる。相手はひらりと、風船の一つに足をつける。ぱたたと踵を返す姿が見える——顔を向けて落ちてくる。

火のない蝋燭の上に乗って見上げた。コルネットが迫ってくる。上に向かって飛び、重心から身体を回転させた。手の中に糸が絡まり、銃身が伸びる。引き金に絡ませた指を手前に引いた。

「くっ——」

反動がマミを上へと運ぶ。身体は軽くなり、スカートが広がって、ブラウンチャコールのあとを残していく。

バレエを踊る要領でスキップする。上が下になり、目の前の蝋燭に足をつけた。それは巨大な塊で、つま先で掴む感覚は柔らかく——周りにマスカット銃が出現させた。銃口をその白っぽい固まりの中に埋もれる。

右から順番にとっては、フリントが当たり金を叩く音をきいた。機械の一部になったように引き金に指をかけ絞った。ぴゅん、音をたてる弾丸は正確な軌道を描いて、魔女めがけて跳んでいく。

硝煙の匂いが広がる。

キュウベえさえもない結界の奥底で、魔女めがけて弾丸を放つ。

一、二、三——六発を命中させた——よるめきながら浮遊する敵は、くると身を翻して、駆け上ってくる。

髪の上に乗ったファーがふわっと持ち上がった。マスカット銃片手に駆け出す彼女はコルネットとの位置を逆転させた。地面が迫ってつま先をつけた。足下を確認してから頭をあげた。コルネットは木の葉のように宙を揺れている。

「これで終わりよ！」

手にした銃を脇に寄せる。指輪が光をどこまでも広げていく。細かい彫刻がその繊細さをそのままに銃身をどこまでも伸ばしていく——それは、瞬く間に貯水槽ほどの大きさへ膨れていく。巨大なクラッカーを抱えるような形になった。

「ティロ・フィナーレ！」

砲は口から火を漏らすと、中心に収束してから光りはコルネットへ向いた。魔法は相手の身体を一瞬で貫通して、火花を吹く——銃は消え、光が飛び散った。胸に焼け付くような感覚——コルネットに目を向けた。表情のない目が外を向いてからくるりと、マミのことをみていた。

その——目が燃えて炎を放つと、中身が音をたてて飛び散った。。

「やった……」

うなずいた。緑色の光が飛び散る様は花火のようだった。あたりを照らし出す光は、緑、青、赤、色とりどりの光を、四方に広げていく。落ちていくのは花びらのような星くず——ひらりひらりと落ちていく。

跳躍して、軽い足取りで着地する。空間がねじれて、花火の中に全てが飲み込まれていく。炎を広げたのとは反対の動きで、収束するのは黒い塊で、やがて全てが消えて、そこに静まりかえったホール——が現れた。

ピアノの上に刺さるきらきらとした蕾のような——グリーフシードを指でつまむ。まだほんのりと熱を持っていた。

「いったい、いつからそこで隠れてたの？」

マミは背後に向かってきいた。背後で揺らめく気配がしていた。変身をとく、見滝原の制服に姿を戻しながら、ほんのりとした感覚を手にしていた。そこには影があった。魔女じゃないとは解っていた。

「話が——」

「趣味がいいとは言えないんじゃない？ ——暁美ほむらさん？」

魔法少女と魔法少女同士、ライバルになったりすることもある。けれど、少なくとも魔女の前では同じだし、狙った獲物をかすめとるようなことは、暗黙の了解があると思っている。

「そうね」

マミは顔を向けた。同姓からみたって、美女としかいいようのないその——暁美ほむらの顔に、感情は伺えなかった。彼女も、また、制服を着ていることに気づいた。

「あなたも、入ることにしたの？」

「ええ、明日から」

こくり、彼女は頷いた。

「それで話ってなんなのかしら？」 マミはきいた。

暁美ほむら——キュウベえもよく知らない魔法少女。

キュウベえが知らない魔法少女がいるなんてことが珍しいことだったけど、マミは仲良くしようと思っていた。だけど、なんだか、なにをを考えているか解らないところがあって——

「あなた怪我してるわ」

「え？」

指摘されて気づいた。脚に傷口がみえた。

痛みがふっと強くなった。右脚に、傷口があった。そんなに深くはなかったけれど、じんと響く感じがして、思わず顔をしかめた。

「——いつもならすぐ直るのに」

「あの魔女は強かった。たぶん、その影響。魔女の影響を受けると、魔法を使っても傷が直りにくくなることが——」

「そう、ありがと。じゃあ、わたし手当したいから、帰りたいんですケド？」

ほむらは一瞬だけ表情をつくって、無表情に戻った。ほむらは言いたいことがあるのに、それを何かは言わない。なんだかはぐらかされているみたいだった。魔女との戦いでささくっていた気持ちに——苛立ちを少しだけ感じた。

「——あの」

「帰ってもいい？」

マミの問いに、ほむらは振り返ってすぐに姿を消した。マミは、その暗がりを少しだけ見ていた。

魔法少女にもいろいろいた。激しい人、優しい人——暁美ほむらは今まであったどんなタイプとも当てはまらなかった。魔女との戦いで消息を絶ったり、急に連絡がとれなくなったり——ほむらはよく解らなかった。

彼女が何か言いたいことがあるのは解った。だけど——強がった口調を使っているけど、足の痛みが強くて、マミはほむらの気配も消えると、顔を歪めてうずくまった。傷は開いていた。魔法で消えてくれなかった。帰って手当をしなければならなかった——

息があがる。痛くて辛くて、今日マミは沢山の人の命を救ったのに、一人だった。傷口はなんだか生々しくて、思わず顔を背けさせた。自宅のマンションのエレベーターまでたどり着くと、ボタンを押した。かごの中の蛍光灯は眩しくて、昼間みたいだった。

廊下を歩いて、鍵を差した。

部屋には誰もいない。家族の影も、素敵な誰かの姿もなかった。

「一人、なんだよね」

口にすると、なんだか余計だった。

誰もいなくて、誰も来ないのに、そんなことをいちいち口にしたって無駄だと思う。戸棚に置かれた救急箱を引っ張り出すと、カーペットの上に腰をおろした。傷口は白い肌と赤のコントラストを鮮やかにしていた。

魔女によって傷つけられた足。血はとまって、やがて傷口も埋まればなくなってしまう。怪我をしても、魔法の力が全てを消え去ってしまう。マミは、それがなんだか怖かった。自分の身体じゃないみたいで、ただ機械的に身体は元に戻っていく。

正時を伝える時計の音がした。

リビングだけに灯された蛍光灯、光があたってない部屋は暗く静まりかえっている。暗い場所には誰もいない。誰もいないのなら、いつそのこと、全ての電球をつけてしまおうかと思うのだけれど、誰もいない場所が明らかになるだけだった。

外は夜で、マンションやビルの灯が見える。

救急箱にふたをして、戸棚に戻した。ダイニングキッチンに立ち、コンロの火をつけた。冷蔵庫の上に、茶葉の缶が整列している。アールグレイ、ダージリンに、カモミール、ルイボス——最後の缶を取る。

遠くに救急車のサイレンの音が響いていた。

お湯の沸騰する音が聞こえた、火を止め、ポットに茶葉を二すくい入れる。お湯をポットにそそぎ込んでいく。湯気がでて広がっていく。ふたをして、ティーカップを出す。ポットの持ち手に指を周し、ゆっくりとカップへと湯を注いだ。

いすに腰掛けると、掌の上に、グリーフシードを取り出し、ソウルジェムと並べた。ジェムの光はだいぶ弱り濁っていた。使い魔ばかり倒していたせいだとは解っていたのに、そうしないと、また誰かが傷つくことになる、そう思うと身体が動いてしまう。

「…あったかい……」

彼女は二つを並べる。ジェムに、グリーフシードの中身を注いだ。

光は元に戻っていく。まだ、グリーフシードは空っぽにはなっていなかった。二つをテーブルの上に置くと、ティーカップに手を取った。

「どうしたの？ キュウベえ？」

課外活動に向かう男女を尻目に、街へでたマミを呼びかけるのは——キュウベえだった。四つん這いで地面に立つ彼は、その鷹揚とした表情を崩さない。

「大変なんだ、マミ」

それだけきけば内容はわかった。彼女は鞆を手にしたまま、キュウベえの言葉に従って、病院へ向かった。病院は街の中心部にあるガラス張りの建物だった。そのガラスは、いつも透明感ある緑の光を放っていたのに、今日はなんだかどんよりとした色に包まれていた。

病院は魔女の標的に遭いやすい。弱った人間が沢山いるし、沢山の人がいれば——事件も起こしやすい。指輪をかざすと、ソウルジェムが光を放った。病院の建物を包む結界に、ピンク色の扉ができて、ノブに手をかけた。

第2章 〈青い炎へ向かって〉へ続く